第 68 回神奈川建築コンクール　住宅部門　最優秀作品選評

「ニカイメノイエ」

審査委員：古賀　紀江

ニカイメノイエと名付けられた本作品は 90 年後のゴカイメノイエまでトータルに計画された、過去と未来の間をつなぐ住まいである。

この家の建て主である建築家達が暮らしていたイッカイメノイエはマテリアルセラー（建築の材料貯蔵庫）として捉えられ、使用可能なものはニカイメノイエの材料となっている。イッカイメノイエの解体では材料のレスキュー率を記録し検証の資料を記録している。さながら令和の実験住宅の趣を持つ。

前の住まいから受け継いだ材料は、柱などの構造材は、その特徴的な外壁や大引きとして釘穴ありのまま利用されている。二階木造部分では運搬・組み立て・解体が容易な大きさにサイズダウンした材料で柱や梁を構成する構法で、未来のイエに材料を受け継ぐという前提を担保した。イッカイメノイエの残土は深谷の粘土や藁と共に混ぜ込み、壁の材料となった。ちなみに 90 年後のゴカイメノイエでは RC 造の一階は利用可能、二階部分はリフォーム、あるいは解体して 90 年物の材料として世に送り出す計画である。

「受け継ぎ」の精神はプランや造作でも明快である。例えば、二階は天井高 3.2m の間仕切り、ロフトの追加を可能にした大空間の素地に、この家族の「今」を支えるためのプランが実現されていた。必要が生じた時に住む人自らの手で改変させる余地を持つ進化するプランである。ニカイメノイエでは、一階は賃貸として計画され、まちに開くことが可能な性能を持たせている。

建築家たちが発明したマテリアルセラーという概念は、住宅ストックに「資源」という新たな側面を加え得ることを示唆している。「資源」化の仕組みができた時、住まいづくりは地域と密接に関係し、建築家たちの言う「次世代へ受け継ぐ循環型住宅のプロトタイプ」が、まちづくりにも繋がっていくのではないかという幸せな空想が広がる。